

---

**事例報告**

---

# 模擬授業のビデオ録画を用いた自己評価の取り組み —授業力自己診断シートを活用して—

落 合 賀津子

北里大学看護学部

## I. 研究の背景と目的

近年の情報化等による社会環境や生活様式の変化に伴い、児童生徒の健康課題は多様化・複雑化、そして深刻化してきている。このような健康課題への対策として、児童生徒が健康に関する原理・原則を理解し、健康生活を実践するための意思決定ができ、さらに生涯を通じて健康な生活を送ることができる能力を身に付けることが重要である。そのため、学校教育において保健教育の充実を図ることが必要である。

保健教育は保健学習と保健指導からなり、保健指導は学校保健安全法第9条を根拠とし、養護教諭の職務として定められている。養護教諭は、学級活動や学校行事において集団を対象とした保健指導や、保健管理や保健室での応急処置などの場面において個人ならびに小集団を対象とした保健指導を行うことが多い。一方、保健学習は教科における保健教育であり、小学校では体育科「保健領域」、中学校では保健体育科「保健分野」、高等学校では保健体育科「科目保健」というように系統的な健康教育が展開され、その内容は学習指導要領に示されている。従来より、チームティーチングなどで養護教諭は保健の教科の領域にも関わってきたが、養護教諭の有する知識や技能を教科保健に活かすことを目的として、1998年（平成10年）教育職員免許法の一部を改正する法律が公布された。この附則15において、養護教諭の免許状を有する者（3年以上養護教諭として勤務したことがある者に限る）で、養護教諭として勤務している者は、当分の間、その勤務する学校において、保健の教科の領域に係わる事項の教授を担当する教諭または講師となることができるようになった（教育職員免許法附則15）。そこで、養護教諭一種免許取得のためには、教育職員免許法施行規則に定める科目として「教育課程に関する科目」である「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」の修得が義務付けられ、本学においては「教育方法論」として2単位30時間で設定されている。

2012年（平成24年）の中央教育審議会答申では、これからの教員に求められる資質能力として、教科や教職に関する高度な専門的知識と新たな学びを展開できる実践的指導力が

あげられている<sup>1</sup>。養護教諭養成段階において、保健学習及び集団に対する保健指導における力量を向上させるためには、保健に関する専門性と実践的指導力を向上させる必要がある。近年、教員養成系大学では、この実践的指導力向上を目的とした模擬授業を取り入れた授業が多く実施され、その有効性についても報告されている<sup>2,3,4,5,6</sup>。本学の「教育方法論」の授業においても保健の教科に関する模擬授業の1単位時間の実施を取り入れている。従来は模擬授業直後に授業分析（相互評価・他者評価）を行い、最終的にレポートにおいて自己の課題を明らかにしていたが、2015年度（平成27年度）からは、自作の学生版「授業力自己診断シート」<sup>7</sup>を用い、より系統的で客観的な自己評価ができるようにした。このシートを活用することで、学生からは「授業力に必要な要素や項目が再確認できた」「自分の強み・弱みを把握できた」「養護実習での研究授業に向けての課題が明らかになった」等の肯定的な回答が多かったが、「診断シートの実施時期によっては自分の言動が詳細に思い出せないため評価が曖昧になる」「児童生徒からどのように自分が見えているのか客観的に知りたい」「学生同士の相互評価や教員の評価は甘いような気がする」という声もあった。伊藤<sup>8</sup>は、授業ビデオ録画に対する自己評価活動は、ビデオ記録によって授業の実際の場面をとらえるということから、教授者の自己モデリングの手段にあたり、自己モデリングは大学の授業において主体的な参加を促進する要因である、と述べている。また、模擬授業の録画ビデオを視聴することは、自己の課題に気づき、授業改善の手段として有効と考えられる。そこで、本稿では、模擬授業を録画したビデオ視聴を基にした授業力自己診断シートの記述内容の分析を通して、授業実践力の向上に効果的な授業方法を検討することを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査時期および対象の属性

- 1) 調査時期：2017（平成29）年7月
- 2) 対象者：A大学看護学部養護教諭教職課程を履修している4年次生、教育方法論を受講した6名全員

### 2. 看護学部教職課程履修の流れ

養護教諭一種免許における教育職員免許法施行規則に定める科目区分は、「養護に関する科目」、「教職に関する科目」、「養護又は教職に関する科目」となっている。「養護に関する科目」の中で、「衛生学及び公衆衛生学」、「健康相談活動の理論及び方法」、「栄養学」、「解剖学及び生理学」、「『微生物学、免疫学、薬理概論』」、「精神保健」、「看護学」は看護学部開講授業科目（必修科目）に対応している。但し、学校・産業看護学、学校保健、養護概説の3科目は、4年次の履修となっている。4年次の養護実習では、実習校に対し保健学習あるいは集団に対する保健指導の実施の依頼をしている。

- 1) 1年次配当教職関係科目：日本国憲法A・Bの中から1科目、健康とスポーツ演習、ライフスポーツ演習A・B・Cの中から1科目、英語B I・II、情報科学A・Bから1科目
- 2) 2年次配当教職関係科目：教職概論、教育原理、教育心理学、カリキュラム論
- 3) 3年次配当教職関係科目：生徒指導論、道徳教育論、特別活動論、教育相談論、
- 4) 4年次配当養護に関する科目：学校・産業看護学、学校保健学、養護概説  
 4年次配当教職関係科目：教育方法論（模擬授業を含む）、養護実習、教職実践演習  
 4月～12月：養護実習事前指導・事後指導  
 9月～11月：養護実習

以上のように、今回の研究対象となっている「教育方法論」における模擬授業は、教職関係科目がほぼ修得できている最終学年の4年次前期（4月～7月）に実施している。

### 3. 科目「教育方法論」について

#### 1) 教育目標

児童生徒が自らの健康課題を解決できるように、養護教諭として必要な授業方法に関する知識や技術を深めるとともに、養護実習に備えて模擬授業を通して教育方法の実践力を培うこと

#### 2) 教育内容

学校における教育方法の歴史、保健指導や保健の授業における授業方法について学び、各自の教育観を明確にする。また、学習指導案を作成し、教材研究、教育機器の活用を十分検討したうえで模擬授業を実施し、お互いに授業分析を行い、養護教諭として適切な保健指導・保健の教科に関する授業についての実践力を高める。

#### 3) 到達目標

- (1) 教育方法についての基礎を理解できる。
- (2) 教育情報機器について理解でき、有効に活用できる。
- (3) 学習指導案を作成し、模擬授業の実践と授業分析を行い、教育方法の実践力を高めることができる。

#### 4) 授業内容

看護学部の学生は、4年次前期において3週間の領域別実習を実施するため、6週間は授業ができず、そのため、2コマ続きの授業構成となっている。領域別実習に入ると模擬授業の準備に時間が取れないことから、授業の6回目の段階で模擬授業の単元等に関する話し合いをし、決定している。

模擬授業を実施する単元については、後期に実施する養護実習校と同じ校種のものを選択するようにしている。2017（平成29）年度の履修生の実習校は、6名全員が中学校

であった。模擬授業にあたって、学生は1単位時間の指導案を作成し教材研究をした上で、養護実習担当教員による個別指導（およそ90分×2回）を受けた。模擬授業は9～15コマ目に実施した。

#### 4. 模擬授業の進め方（図1 参照）

- 1) 模擬授業指導案を作成し、担当教員の個別指導を受ける。
- 2) 模擬授業前日、実施教室においてリハーサルを実施し、担当教員の指導を受ける。
- 3) 模擬授業実施学生以外の学生が児童生徒役となり模擬授業を行う。
- 4) 授業開始から終了までの模擬授業の様子を教員がビデオ撮影する。
- 5) 模擬授業実施直後に、模擬授業研究会（授業分析・意見交換）を開催する。

##### （1）学生同士の相互評価

学生が教える側と、生徒役として学ぶ側の両方からの立場を経験し、お互いに授業分析をし、評価し合う中で望ましい授業のあり方について学ばせる。模擬授業終了後のおよそ10分間で、生徒役の学生は事前に配布されている「授業分析シート」を用いて評価し記入をする。評価項目は①授業展開（導入・展開・まとめ）、②説明・発問・指示の仕方、③声の大きさ・声のメリハリ、であり、それぞれの項目について、よかった点、もっとこうすればいいと思う点を記入する。また、「授業をしている時の態度」、「この授業を通して伝わったこと」、「全体の感想」も記入する。「授業分析シート」をもとに学生同士で意見交換を行う。

##### （2）教員からの他者評価

学生同士の意見交換後、教職課程に関わる看護学部の教員および教職課程センターの教員から講評を受ける。

#### 6) ビデオ録画CD視聴による「授業力自己診断シート」を用いた自己評価

模擬授業実施者はビデオで記録した模擬授業の映像のCDを教員から受け取る。模擬授業直後に実施された模擬授業研究会における他学生及び教員からの評価を参考に、個人でビデオ録画CDを視聴し、「授業力自己診断シート」を活用して自己評価をし、模擬授業終了後2週間後までにレポートを提出する。なお、「授業力自己診断シート」は模擬授業を実施する前に学生に配布し、模擬授業を実施する上での視点として提示している。

「授業力自己診断シート」とは、Excelで作成した自作の学生版「授業力自己診断シート」（表1）である。模擬授業後にこのシートを用いて自己評価し、その評価を基に引き続き実施される養護実習の授業に向けて取り組むべき内容を明らかにする。さらに、養護実習での授業（保健学習あるいは集団に対する保健指導）後にも同シートを用いて評価し、模擬授業の自己評価と比較できるようになっている。「授業力自己診断シート」は、診断項目ごとに4段階評価（1：あてはまらない 2：あまりあてはまらない 3：だいたいあてはまる 4：あてはまる）で数字を入力すると、構成要素ごとの平均がレーダー

チャートグラフに反映され、数量化・可視化できるようになっている。その結果を参考に、模擬授業を総合的に評価し、養護実習の授業にむけての取組みについて自由に記述ができる様式となっている。

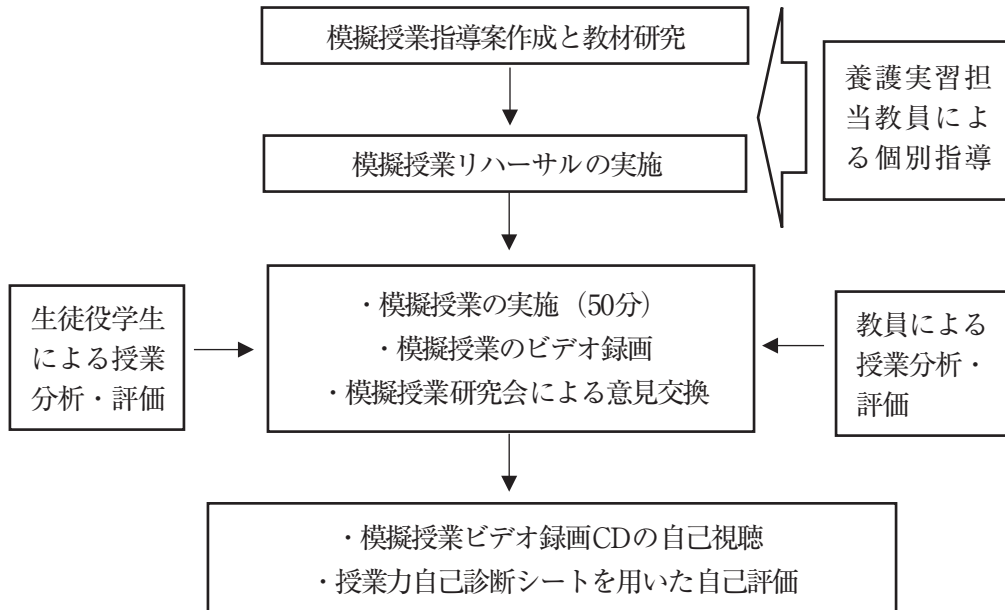


図1 模擬授業の進め方

表1 「授業力自己診断シート」診断項目

要素	診断項目	
1	使命感・	学習のねらいをすべての児童・生徒に達成させようとしている。
2	熱意・	教材研究を行って授業に臨んでいる。
3	感性	ものごとに対する幅広い関心をもっている。
4		心と体の調子を整えて授業を行っている。
5		明るく前向きに児童・生徒に接している。
6	児童・	児童・生徒一人ひとりの学習意欲を把握しようとしている。
7	生徒理解	児童・生徒一人ひとりの本時の学習の達成状況を把握しようとしている。
8		児童・生徒一人ひとりの変化を把握しようとしている。
9		児童・生徒一人ひとりに気を配り、言葉かけをしている。
10		児童・生徒の発言や行動を共感的に受け止めている。
11	統率力	学習にふさわしい環境づくりを心掛けている。
12		基本的な学習ルールを定着させている。
13		的確な指示を出して集団を動かしている。
14		学習のねらいを明確に示し、学習に見通しをもたせている。
15		児童・生徒の反応や変容に気付き、授業に生かしている。
16		学習状況に応じて適時・的確な判断を行っている。

17	指導技術	児童・生徒に学習の準備についての的確に指示している。
18		授業の始めに学習のねらいを児童・生徒に明確に示している。
19		個に応じた指導を行っている。
20		児童・生徒が自ら考えたり、自ら取り組んだりする主体的な学習を促す工夫を行っている。
21		教材・教具を効果的に活用している。
22		発問の工夫をしている。
23		児童・生徒の反応を生かしながら、授業を構成している。
24		分かりやすい説明をしている。
25		効果的な板書をしている。
26		授業のまとめを工夫している。
27	教材解釈 ・ 教材開発	教科等の専門的知識を深めている。
28		日頃から教材に関連する幅広い情報を収集している。
29		学習のねらいを明確に把握して教材解釈や教材開発をしている。
30*		学校・地域の特色を考慮して教材解釈や教材開発をしている。
31		生活との関連を意識して教材解釈や教材開発をしている。
32*		児童・生徒の実態を考慮して教材解釈や教材開発をしている。
33		児童・生徒に興味・関心をもたせるための教材解釈や教材開発をしている。

\* 模擬授業では評価項目としない。

## 5. 分析の視点

- 1) 「授業力自己診断シート」の5要素について学生の評価結果を分析する。
- 2) ビデオ録画視聴による自己評価の自由記述内容を意味内容ごとに分類・整理する。

## 6. 倫理的配慮

「授業力自己診断シート」の提出の有無や自己評価が成績評価には関係しないことを口頭で説明し、6名全員が了承した。

## Ⅲ. 結果

### 1. ビデオ録画視聴に基づく「授業力自己診断シート」の5要素の評価結果（表2）

5要素を構成する下位項目数は、「使命感・熱意・感性」5項目、「児童・生徒理解」5項目、「統率力」6項目、「指導技術」10項目、「教材解釈・教材開発」5項目の計31項目である。それぞれの要素の平均値、最大値、最小値、標準偏差は表2に示した。「使命感・熱意・感性」の平均値が3.3と一番高かった。平均値が一番低かった要素は「指導技術」2.7であった。

表2 模擬授業に対する「授業力自己診断」の結果

5要素	要素ごとの平均得点				
	使命感・ 熱意・感性	児童・ 生徒理解	統率力	指導技術	教材解釈・ 教材開発
平均値	3.3	2.8	3.0	2.7	3.0
最大値	3.6	3.2	3.3	3.5	3.2
最小値	3.0	2.4	2.5	2.0	2.4
標準偏差	0.20	0.30	0.30	0.47	0.32

## 2. ビデオ録画視聴に基づく自己評価の自由記述内容

自己評価の自由記述を意味内容ごとにカテゴリー化し、以下のように分類した。( )内は記述された個数を示す。

### 1) 課題として表現された内容

- (1) 話し方や声の大きさ等の指導技術の不足 (11)
- ① 普段の癖(口癖、仕草、等)や傾向(雑さ、等)が出ている (3)
  - ② 緊張からか思ったよりも早口、声が小さい、口ごもって聞き取りづらい (2)
  - ③ 髪の毛を無意識に触る等の動作が生徒の集中を欠く
  - ④ 焦りや不安の表情が現れ、生徒を不安にさせると思う
  - ⑤ 思ったよりも靴音が大きく生徒の集中を欠く
  - ⑦ 思ったよりも下を向いている時間が長い
  - ⑧ 話し方が単調でメリハリがない
  - ⑨ 板書の時の体の向きが悪く、話が伝わりづらい
- (2) 板書や掲示資料のわかりづらさ (4)
- ① 板書の字や図が小さく見えにくい (2)
  - ② 掲示資料の量が多くポイントがわからない (2)
- (3) 発問やフィードバック、生徒の反応を生かす等の相互作用行動が未熟 (6)
- ① 発問や呼名するタイミングが悪い (2)
  - ② 生徒の発言に対するフィードバックがなく一方的 (2)
  - ③ 生徒の発言を生かした対応ができていない (2)
- (4) 教材研究や授業準備の不足 (10)
- ① 教材に関する知識不足 (2)
  - ② 時間配分の予測が甘い
  - ③ ワーク中の机間指導やワークシートの活用の仕方に関する準備ができていない

- ④多くの情報を詰め込み過ぎてポイントが焦点化されていない
- ⑤授業構成がわかりづらい
- ⑥教科書を活用できていない
- ⑦思ったより説明が長くわかりづらい
- ⑧興味を引く説明となっていない
- ⑨グループワークで何をさせるかが不明確

(5) 発達段階等に関する生徒理解の不足 (6)

- ①難しい表現が多く実際の生徒なら理解できていないのではないか (2)
- ②生徒の発達の特徴や理解力を理解できていない (3)
- ③ワークシートの内容が生徒の発達段階に適していない

(6) 臨機応変に対応する力の不足 (4)

- ①ハプニングや予想外の生徒の反応への対応ができていない (2)
- ②生徒の反応を気にし過ぎて進行が滞っている
- ③指導案通りに実施することにとらわれすぎている

2) よかった点として表現された内容

(1) 授業を楽しんでいる自分を発見 (3)

- ①緊張していたが思ったより楽しそうに授業をしている
- ②思ったより表情が明るくて驚いた
- ③生徒の肯定的な反応を嬉しく受け止めている

(2) ねらい通りに進められた満足感 (4)

- ①何度も試したので文字の大きさや掲示資料の配置が見やすかった (2)
- ②教材研究に時間をかけたので焦点化されており知識の定着につながった
- ③指導案を何度も指導してもらったので授業の構成がうまくいった

(3) 生徒への共感的で誠実な対応 (2)

- ①生徒の反応を共感的に受けとめていた
- ②生徒に対して誠実に対応していた

(4) ビデオ録画視聴の感想 (9)

- ①生徒の目線、立場で考えることができた (3)
- ②自分を客観的に見ることができた (2)



- ③模擬授業研究会での他学生の助言の意味がわかった
- ④緊張して詳細まで記憶していなかったなので録画を見てわかったことが多かった
- ⑤自分が考えている以上に生徒にはいろいろなことが伝わっていると思った
- ⑥自分の言動が授業の雰囲気を作ることに気づいた

3) 模擬授業からの学びや養護実習の授業にむけての取組みについての内容

- (1) 看護を学ぶ養護教諭としての授業観が必要である (4)
  - ①健康の保持増進の視点で、生徒にどうなってもらいたいのかしっかりした指導観をもつことが重要
  - ②日常の養護活動が保健学習で何を伝えたいかにつながる
  - ③看護を学んでいる立場を生かした特徴ある授業をしたい
  - ④誰のための何のための授業なのかを考えることが大事
- (2) 授業においては十分に生徒を理解することが必要である (3)
  - ①集団の健康課題を把握した上での授業でなければならない
  - ②生徒の発達段階や理解度、関心度等を把握することが大切
  - ③受け取る生徒がどう感じるのかを考えることが大事
- (3) 臨機応変に対応するためにも事前の教材研究や授業準備が必要である (4)
  - ①予想しない反応に対応するために教材に関する知識理解を深めることが大切
  - ②計画通り進まないのは当然なので、だからこそ準備をしっかりする
  - ③ハプニングがあることを予想し、時間調整ができるように準備しておく
  - ④自分の中に引き出しをたくさん持っておきたい
- (4) 生徒の反応を生かした、生徒と共に作り上げる授業をしたい (4)
  - ①一人ひとりの生徒の反応をしっかり見ることが大事 (3)
  - ②生徒とのやりとりの中で、授業を作り上げるようにしたい
- (5) 教師として適切な言動、立ち居振る舞いができるようにする (3)
  - ①自分の癖や傾向を知って日常生活でも意識する (2)
  - ②教育者として子どものモデルとなるため、普段から適切な言葉を使うようにする
  - ③普段から人前で話す場を自分から作りたい

IV. 考察

ビデオ録画視聴に基づく「授業力自己診断シート」の5要素の4段階評価の結果は、「使命

感・熱意・感性」の平均値が3.3と一番高かった。標準偏差も0.2とばらつきは少なく、すべての学生が授業に取り組む自己の姿勢を比較的高く評価していた。学生の授業に対する前向きな姿勢を伺わせる内容は、養護実習の授業にむけた自由記述内容からも伺われる。例えば、「日常の養護活動が保健学習で何を伝えたいかにつながる」「看護を学んでいる立場を生かした特徴ある授業をしたい」という記述からは、看護を学ぶ養護教諭としての使命感を感じる。また、「自分の癖や傾向を知って改善するために日常生活でも意識する」「教育者として子どものモデルとなるため、普段から適切な言葉を使うようにする」「普段から人前で話す場を自分から作りたい」というように、教師として成長するために日常においても意識的に生活しようという意思を感じる。平成24年8月中央教育審議会答申の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」<sup>9</sup>の記述には、これからの教員に求められる資質能力の一つとして「教職に対する責任感、探求心、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力」という内容が示されている。学生は、模擬授業を振り返る中で、教員に求められる資質能力の一つである「教育者として学び続ける必要性」に気づいたということがいえるであろう。

「授業力自己診断シート」の平均値が低かったのは、指導技術の2.7であった。標準偏差が0.47とばらつきがあり、学生による個人差が大きいと考えられるが、自由記述ではすべての学生が自己の指導技術に関する課題を取り上げていた。なかでも、「声が小さい」「話し方が単調」「早口でわかりづらい」等の声の大きさや話し方等に関する技術の未熟さを課題として挙げた学生が多かった。さらに、「普段の癖が出ている」「無意識の落ち着いた動作」等、意識していなかった立ち居振る舞いに気づき、「思っていた以上に下を向いている」「思ったより靴の音が大きい」「話す時、板書の時の体の向きが悪く、生徒に伝わりづらい」というように、より正確に自己を客観視できていた。これらの気づきは「無意識」や「自分が思った以上」という表現からも、ビデオ録画を視聴しなければわからなかったのではないかと思う。さらに、「発問のタイミングが悪い」「生徒の発言に対するフィードバックがない」「生徒の発言を生かした対応ができていない」「生徒の言動を気にしすぎて振り回されている」等、発問やフィードバック、生徒の言動を生かした対応、というような相互作用行動の未熟さにも気づいていた。この気づきは、「養護実習に向けて生徒の反応を生かした、生徒と共に作り上げる授業をしたい」という記述にも繋がっている。また、重要な指導技術として板書があるが、この点の課題としては「板書の字や図が小さく見えにくい」「掲示資料の情報量が多すぎてポイントがわからない」等の記述が見られ、板書技術が生徒の理解や思考に影響することに気づいていた。

山中<sup>10</sup>は、授業を行う上での重要な点として「目指す授業像を明確にすること」「教材研究の基礎を身に付けること」「授業を行う上での基礎的な指導技術を身に付けること」の3つを挙げている。「授業力自己診断シート」を用いた模擬授業の自己評価の点数や記述からは「指導技術」に対する課題が多く挙げられ、授業を行う上での「指導技術」の重

要性に気づいているということがいえる。特に「指導技術」の中でも基本技術である「教師の話し方」に関する課題の記述が多かったことは、映像の視聴による振り返りの効果であると考えられる。また、自分と生徒のやり取りを映像で客観的に振り返ることで、発問やフィードバック、生徒の発言への対応が適切でなければ意図的な授業展開にならない、ということ学んだと考えられる。

これまで述べた指導技術としての発問や板書技術は、意図的な授業展開に直接関わるものである。つまり、発問や板書技術の質は「教材研究」と「生徒理解」の質に関連するといえる。そこでこの2つの要素について「授業力自己診断シート」の結果を見てみると、「教材研究」の平均値は3.0、「生徒理解」は2.8であった。「教材研究」に関する課題は「知識不足」「説明がわかりづらい」「授業構成がわかりづらい」「時間配分の予測が甘い」「ねらいが焦点化されていない」等、「指導技術」と同様に多くの課題が明らかになった。また、「生徒理解」の不足に関しては「生徒の発達の特徴や理解力を理解していない」等という記述から読み取ることができ、結果として情報を受け取る生徒の視点に立った授業づくりへの意欲につながっている。この2つの要素は、よかった点の記述として「何度も試してみたので掲示資料が見やすかった」「教材研究に時間をかけたのでねらい通り進められた」とあるように、事前に教材研究を深めることで多くのことが解決できると考えられる。もちろん、授業を行う上では変化に対応する力も必要である。学生は模擬授業を振り返る中で、生徒の予想しなかった反応やハプニングに臨機応変に対応する力の不足を実感している。同時に、「授業は計画通り進まないのは当然」ということに気づき、「ハプニング等に臨機応変な対応をするためには、事前の教材研究や授業準備が必要である」という学びを得ている。つまり、学生は模擬授業の映像視聴を振り返ることで、積極的に教材研究に取り組み、生徒理解を深め、授業準備を確実に行うことが重要であることを学んだといえる。

模擬授業の振り返りの中で多数見られた「思ったよりも」という表現から、映像を視聴することで教師としての行動や授業内容を客観的に観察でき、課題の再認識や新たな課題の発見につながっていたと考えられる。このことは、「生徒の目線、立場で考えることができた」「自分が考えている以上に生徒にはいろいろなことが伝わっていると思った」「模擬授業研究会での他学生の助言の意味がわかった」というような映像視聴の感想からもわかる。模擬授業直後の研究会における他学生からの評価を基に振り返りを一度し、さらにビデオ録画視聴による自己評価をすることで、授業改善に向けたより深い考察ができたといえる。

一方、ビデオ録画視聴により発見できたのは課題だけではなく、「思ったより授業を楽しんでいた」「生徒の肯定的な反応を嬉しそうに受け止めていた」「生徒の反応を誠実に受け止めていた」というように、教師として好ましい自己の言動を観察できていた。これらの気づきは、養護実習にむけての意欲、養護教諭に対する志向性を高めるものとなっていることが期待できる。

「教育方法論」の授業で実施した一連の模擬授業の評価と振り返りは、いわゆる授業リフレクション（省察）である。授業リフレクションとは、授業者が自分や児童生徒の姿を意図的に捉え、それを手がかりとして振り返り、授業改善の方策を講じる内省的研究方法である。「授業力自己診断シート」による自己評価の結果を分析した結果、模擬授業の映像を客観的に視聴する授業リフレクションは、授業観察力を育成し授業力向上につながると考えられた。

## V. 文献

1. 文部科学省,中央教育審議会 (2012):「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(答申) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/miryoku/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/15/1326877\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/_icsFiles/afieldfile/2012/10/15/1326877_1.pdf) (2017年10月25日検索)
2. 木原成一郎,他 (2007): 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究,広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部,56: 85-91.
3. 福ヶ迫善彦,他 (2007): 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討,愛知教育大学保健体育講座研究紀要,32: 33-42.
4. 徳永隆治 (2009): 模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究,安田女子大学紀要,37: 197-207.
5. 宮尾夏姫,他 (2014): 体育科模擬授業における学習成果-授業・授業づくりの要点の理解と学習を促す模擬体験の事例的検討-,びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要,12: 93-104.
6. 松本奈緒 (2015): 複数回の指導経験から反省的実践力を保障する体育教師カリキュラムの検討-マイクロティーチングと模擬授業の実施・省察を通して-,秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門,70: 33-43.
7. 落合賀津子,他 (2015): 養護教諭を目指す学生の模擬授業の自己評価に関する一考察-授業力自己診断シートを用いた試み-,北里大学教職課程センター教育研究,1: 7-20.
8. 伊藤秀子 (2004): 大学授業における学習者と教授者の主体的参加を促す要因,日本教育工学会論文誌,28:241-244.
9. 再掲 1
10. 山中護 (2017): 教員養成大学における模擬授業の系統的指導のあり方-算数科及び社会科の実践をもとに-,39:29-42.